新著紹介

世界に於ける希臘文明の潮流

文學博士　坂口昂著

希臘文明が一般世界文明に對して重要なる意義を有することは自明の事實として何人も之を認める。從來之を特別な題目として纏まつた著述のなかつたことに對しても恐く其れが自明の事實と認められて居るといふことが一の因をなして居るのではあるまいか。併し此事の that は自明であつても其 what 及び how に就ては尙ほ、單に吾々門外漢に取つて幾多未知の圏域があるのみならず、專攻學者に對しても多くの研究の餘地が殘されて居る、殊に希臘文明の東方傳播の情況といふが如きに至つては現に一部學者の探求心をそゝる重要題目となつて居るといふ。本書は「從來未だ試みられざりし」此好題目を捕へて、「西ジブラルタより東印度までの古代世界を主とし、吾人の棲息する近代世界に亘りて貫流するヘレニズム文化の主潮を世界史的見地に立ちて追究闡明」したものであつて、先づヘレニズム時期の希臘文化及び其背景としての其以前の希臘文化の叙説に筆を起し、希臘文明の東方傳播、其の羅馬に及ぼした影響、古代の宗教界と希臘文明、近代文化と古典等と順を追ふて極めて明快にして精彩ある筆致を以て叙説されて居る。殊に著者が重きを置いた古代の部は著者獨特の舞臺として上古東西諸文化の紛糾した關係をば巧みに分解究明してあるところ最多くの示教と深き興味とを吾々に與へる。題し「に於ける希臘文明の潮流」といふも、其希臘文明が世界文明の重要契機となつて居る結果として、吾々は此書をば多少の制限を以て、希臘文化を中心として書かれた、上下二千五百年に亘つた世界文化史と見て差支ないと思ふ。從つて吾々は其れが、此種の著述を缺いで居つた我邦に於て廣く一般讀書社會に歡迎せらるべきものであると信ずるが、併し予は特に西洋哲學の研究者及び學習者に之を薦めたい。何となれば西洋哲學は大體希臘思想の影響及び刺激と消長を共にして居ると思はれるからである。中世基督教哲學は原始基督教が漸次希臘思想を取入れ、之を類化し、之に應化することによつて興つた。近世哲學は希臘古典の直接研究を通して興つた。カント直後の獨逸最盛期の哲學も亦た其直前及び當時の詩人、批評家、哲學者等の希臘憧憬、希臘研究熱を主要なる素地及び背景として居る。現代新理想主義の勃興の如き亦、前世期中葉以後閑却されて居た「フマニスムス」鼓舞の聲と伴つて居る。而して是等種々の時期の哲學に對する重要なる文化背景は此書に於て「簡明平易に」、併しあくまでも研究的態度を以て、而して著者獨特の筆致と、著者自身の「實地の踏査、實物の觀察等」と、添附された一百餘圖の挿畫と相俟つて直觀的に、吾々の前に展開せられて居る。東京神田文會堂發行　二圓五十錢（朝永三十郎）

カントと現代の哲學

文學博士　桑木嚴翼著

我國民的文化意識を眞の意味で豐富にし深化して行く上に、最

も基本的で且つ緊急切要であり乍ら、而も最も閑却され勝ちで且つ最も充足されて居らぬ豫備條件中の重たる一つとして、何人にも異存のないのは、恐らく西洋哲學史上の第一流哲學者を日本化すると云ふことであらう。茲に豫備條件としての日本化と云ふのは、彼等の基本的著作の完全なる飜譯と、彼等の思想に就ての歴史的組織的研究の發表を意味する。尤も現代西洋哲學者の著作の飜譯や解說や研究やは、量に於て可なりの高を示して居る。然しその中には、之を缺ぐも可なるもの尠からず、之に反して無くてはならぬものを多く缺いで居る、夫れでも流石に量の多いだけに少しは見るに足るものもある。古來一流哲學者の著作の飜譯に至つては、其量に於ても質に於ても貧弱なものである。長の年月多大の勞苦を費して二三の外國語を修得し得た少數識者は別として、一般日本人には、人類永遠の視禍であり文化不盡の活源である百歲希出の書籍は大抵閉された門戸であるのである。歴史的組織的研究に至つては、部分的主題について優秀なる論文を見ることは多いが、一人の大哲學者或は或時代についての包括的全體的研究は極めて僅少で、其の中見るべきものとては恐らく九指を屈するにも足りないであらう。從來斯うした狀態にあり來つたのは種々困難な事情の存在する所爲であるには違ひない。然し飜譯はしばらくさて措き、歴史的研究の貧弱には、そこに又た一種特別の事情が伏在して居るのである。夫れは、日本人は西洋哲學に就いて根本的研究を施したり新見解を樹てたりすることが至難な位置に置かれて居る、たとひ不可能でないにしても折角骨折つて其の結果は西洋の研究者以上に出でることが出來まい、と云ふ一種臆病な自棄的豫斷が、存外一般に強く喰込んで居ることである。そして此豫斷の根底には、歴史的研究をば考證的文獻學的穿鑿を本體とするものと見る偏狹な見解が潜んで居るのではないかと思ふ。此見解は過去を過去として寫眞的忠實さを以て再現せんとする歴史學の模寫主義に立脚するものである。少くとも手段を目的と誤認する本末轉倒の見である。斯る偏見や豫斷の迷雲を一掃すると云ふ一事だけでも、『カントと現代哲學』の一書は我國思想界の朝暾と見なければならない。

本書の主人公として、選ばれたカントの我國思想界に對して有する意義を考へて見る。古今の哲學者中誰を以つて最大至上の思想家とするか、また誰が自分にとつて最も懷しみある思想家であるかと問へば、人それぞれ答ふる處を異にするでもあらう。然し最大最深なるものの一人たる榮譽をカントに與へることには、何人も異存あるべくも思はれぬ。又日本化せらるべき哲學者を選取するに當つても、選擇標準の立て方によつて、前後輕重の次第が色々に極められることであらう。然し現代日本の一般的要求——事實の上ばかりでなく寧ろより多く當爲的意味での一般的要求を標準にとれば、他の何人をさし措きても眞先に日本化さるべき必要と權利とを有するものは、恐らくカントであらう。現代哲學の殆んど凡てが、カントを度外視しては之を正當に理解評價することの出來ない、と云ふ一事を念ふたばかりで、既に彼に日本化せらるべき第一位を與ふるの正當なこと明かであらう。のみならず我國には、カントを知ることによつて、自づと放拋或は修正されるであらう處の幾多の淺はかな心理主義的偏執や、薄べらな直覺

論的妄想が横行して居る。歐洲第十八世紀の啓蒙思潮、第十九世紀中葉の實證主義の克服がカントを要したと同じ程度に、我國現代の思想界にはカントを要するのである。然しこれは何れと云へばカントの持つ消極的破邪力の方面である。もつと深い積極的建設的の方面に於て更に切實にカントの日本化を必要とする。カントの哲學は、彼の見方に同意反對の如何を問はず、彼の思想に共鳴の有無に頓着なく、苟くも眞理の問題自我の問題實在の問題を自己の問題として眞劍に思索する程の人ならば、一度は必ず精細に研究して見ねばならぬものである。彼に依つて哲學の基石がすへられたと考へ、彼の立場を純粹徹底的に支持開展しやうと努力する新カント派の人達は申す迄もないとし、彼以上に出でんとする一元論的新理想派の人も、乃至は彼に反對の態度に出る實證論や直覺派の人も、一應はカントの說く處を聽く義務がある。彼を逾超するのは必須のことであらう。新カント派でも文字通りにカントに盲從するものは居ない。然し逾超する前に先づ彼を理解せねばならぬ。彼の思想は之を理解することなしに看過されることを許さない偉力を持つて居る。今日カントを理解せずこれに對する態度を決せずして、學としての哲學を組織し、普汎妥當的人世觀を提唱する人あらば、其人は會々以つて自己の識見の淺薄を暴露するか、さらずば思索の懶惰を表白するに止まるのみと評されても致方ないであらう。

斯く迄重大なる意義を有するカントである。然るを其數多き著作中一卷の『哲學序說』を除いては――勿論これは三批判書に次で大切なものであるに相違ないが――我國に飜譯されたものが無いと云ふことは、我思想界の恥辱であり又償ひ難き損害である。(尤も是三批判書も、目下異常の苦心と熱心とを以つて適任者の手によつて飜譯進行中であり、就中第二批判は近く世に出づべしと聞いて、心窃かに慶賀して居る次第である)。而して彼の批評哲學全體を歷史的組織的に敍述したものは愚か、數多き解說書の一つさへも我國に詳しく紹介されて居らぬと云ふに至つては、よく考へて見れば不可思議千萬の次第といはねばならぬ。然し思直して見れば斯樣な狀態にあり來つたのにも相當の理由はある。最も簡便なる方法をとり、平易に出來上れる外國の解說書を單に紹介飜譯するでさへもが、實は容易な仕事ではない。何者他の多くの哲學者よりもカントの立場は之を正しく理解するに困難であるからである。手取り早く簡單に事を運んで行くことの好きな人には、同感し難く且つ面倒至極に思へるからである。進んで彼の著作を直接に廣く細かく研究して、之を遺憾なく解說することは更に一層困難な事業である。これ『一度解說の書を離れて原本を檢すれば既に理會に苦しましむる所も尠からず、而して更に諸家の研究註疏を寘へば疑義百出昨是今非を覺ゆるものが甚だ多い』からである。從つて『進んで倦まざる精神と學に忠實なる良心とを專らにすれば、私は寧ろたゞ退いて自己修むるの最も正當且つ安全なることを信ぜざるを得ない』との態度をとりたくなるのである。況してや既出の諸研究を涉り、これ以外又は以上に別に一個の新見解を樹立し、これに基いて彼の哲學全體を再構成するに至つては蓋し至難中の至難事である。これカントを理解してこれを逾超したる人にのみ許され得る事實であるからである。斯く考へて來れ

に、從來カントについての部分的研究はあつても、其の全體的解說研究の出なかつたことは穴勝ち無理ではないことが覺り得られるのである。熱い同情と鋭い理智とを以つて、カントに就ての精しき研究を積んだ人にして、初めて此至難の業に堪へる資格と、而してこれに着手する權能とを持つのである。而して斯る資格と權能とを、人も許し自からも任ずる學者によつて著された、最初の偉大なる研究的解說をば、吾々は正しく此『カントと現代の哲學』と云ふ一書に於て獲たのである。此意味に於ても亦、本書は獨り專門學者のみならず、苟しくも一般人文に關心を有する人々の看過すべからざる著作である。

此書の價値の一面を示す一個の事實を語るものとして、私一個の經驗を玆に附言したい。私は初め本書に對して多少研究的態度を持してゆつくり讀む覺悟であつた。然るに頁を追うて行く中に其明快にして趣味溢れるばかりの叙述につい釣り込まれ、眞に文字通りに一氣に通讀して仕舞ひ、持すべき筈であつた第三者的態度を何時の間にか失つて居るのに氣附いた。夫の難與晦深を極めた思想を、斯く迄理義明白に論理整然と首尾貫徹せしめ情趣豊かなる筆致を以つて叙述してある點に於て本書は一般讀書子の感謝を要求する性質をも併せ備へて居るのである。要之に此書が現代日本の思想界に對して有する深甚の意義を考へ、其敍述の內容と文致の優秀とを見て、私は是非とも讀まなくてはならぬと云ふ普汎的要求の妥當を本書に認定するを憚からないものである。これから順序として追章梗概の紹介に移るべきであらうが、さうした月並の行方は、本書の如きものにとつては强て必要のことでもあるまいと思ふから之を措く。たゞ一言を禁ずることの出來ないのは、此書に於て著者のとられたカント解釋の態度と、發表された物自體に就ての新解釋とである。

典據を正し異釋を批評して客觀的のカントを再現するに力めると云ふ純粹歷史的研究も行はれて居り、就中本書第二篇には此種のものを見ることが多いが、今當面の主題として居る本書第一篇に於て、著者の最も意を致されて居る點は、彼の哲學の最も基本的なる精神を捉へ、それが彼の多方面の思想を事實如何樣に統一し活働せしめて居るか、又それが當然到達すべき論理的歸結の如何なる補完新釋を將來するかを明にして、以つて夫が現代思想界の活源たる所以の理を示きうとするにある。從つて著者も斷られて居る通り『或場合にはカントを離れる』ことも必須となつて來るのである。單に過去を過去として忠實に穿鑿することも、所謂客觀的實證的たることを念とする歷史研究に、大切なことであらうが、眞の意味での歷史は過去を現在に對する交涉に於て觀る――現在に活きる過去は必然に過去を超越する。否過去の理解其ことが實は其超越を內面的必然を以つて要求するのである。理解とは構成の意であり超越とは創造の謂である。著者の『カントを離れる』とは實はカントを眞に理解したことの表現である。而して『文義通りの解釋とは思はぬ』が『多少の異議を豫想しつゝ』『敢て大膽に』主張せらるるカントの物自體についての新解釋は、此意味に於てのカントの超越であらねばならない。

カント哲學のあらはれた當座や次で發展した獨逸唯心論の時代

には、カントの物自體の概念が哲學的關心の一焦點であつた。現代は之に反してカントの提唱した批評的方法の眞義如何がカント解釋の中心問題となつて居る。此問題の移轉、問題の轉換は哲學的思索の進歩を示す左券である――斯んな趣意をネルソンが『所謂認識問題に就て』の冒頭に說いて居る。說者自身の一般カント理解の當否深淺は別として、右の所說だけは或程度迄妥當である心理主義的實在論的解決との混同を排正することに全力をつくして居る現代論理派就中新カント派の人々にあつては、批評法の純化開展が其最大至深の意義ある事業と見做されて居る。其結果、カントにあつては方法論に劣らず重大な役目を演じて居る物自體の概念は、或は論理上の矛盾として黜けられるとか、或は實在論的遺物として輕視されると云ふ慘めな取扱を受くるの已むない狀態に立至つた。然しこれは果して正當な取扱法であらうか。現代の哲學には果して何等の意味に於ても物自體的の概念を必要としないであらうか。著者の新釋は此點への着眼に起因したのではあるまいかと私は想像するものである。然し物自體の概念を活かすが爲めには、夫れをカントの方法論的根本見解と矛盾するものとしてはいけない。飽迄先驗論的立脚地を守り乍ら、形而上學的神秘的實在と見られ易い物自體の概念を異る光の下に復活せしむること、著者の目ざす所は正しく此方向に横はつて居る。而して著者は物自體をキンデルバントの『價値に關係せしめて知識となる所のただ一回のみ起り得る歷史的文化的個性的現象』と相卽することによつて、玆にカント解釋に一新生面を開拓し來られたのである。然し一面客觀的歷史研究たることをも要求する本書の性質上、此提案を單に提案として止めて置く譯には行かない。玆に於てカントの言說及び學說組織其者の內に所依を發見し、その內面的體系構成力素として働いて居る次第を說示すると云ふ、極めて困難な事業が初まるのである。

著者の解釋に從へば、カントの物自體の概念には消極的と積極的との二方面がある。消極的には科學的知識となり得ざる殘餘の部分と云ふ意味にての限界概念であり、積極的には科學的知識以外のアプリオリによつて別種の知識となし得る對象を意味すると云ふ。今著者の研究の結果を要約して見れば、次の如きものとなるやうに思はれる。先づ消極的方面(第一批判にあらはれたる)に於ては、第一に物自體は共通遍在的方面を撰取する法則的一般的認識の範疇に當はまらぬ殘餘の部分であり、第二に之れを形而上學的實在と解し價値上の優位をこれに認定する普通の見解を排し、一般的見方と對等並立的見方に過ぎずとし、玆に批評法を主體として物自體を解釋するの態度を明示してある。而して第三に件の物自體は一般的見方に這入り得ざるもの卽ち個性的見方であるとし玆に物自體は全體中に於ける個體と云ふやゝ積極的規定を受けて來て居る。第一批判の第三アンティノミーの因果對自由の概念に端緒を開き、第二批判以後の著作に於て建設された物自體の積極的方面とは、全體對個體の關係を、價値又は目的てふアプリオリによつて觀ることによつて、法則的知識とは異る別種の文化學的知識を成立せしむることを意味する。而して此場合にも方法論主位の立場は嚴守されて居る。たとへば人格の如きも、單に性格に對する一の見方――卽ち自由或は自己目的と云ふ範疇によつ

て可能にされた一の對象に他ならずとし、これに經驗的性格と異る優越を認めないのである。

純粹客觀的の立場からは、著者も既に斷はられて居る通り、十分なる典據を缺ぐとの批評が出るかも知れない。超越批評的の見地からは、もつと深い解釋が施し得るとの觀察が下されるかも知れない。然し此兩者何れも著者の目ざす所とは異る立場である。從つて其批評は必ずしも著者の念とする所に的中しないと言ひ得る。然し亦此兩者の立場を出來得る限り包攝することも、著者の希はる處であらう。そこで著者の立脚される內在組織的見地を充分に立證する爲めには、物自體をその歷史的由來と本文の依據とに於て基礎附けること、これが體系組織の構成方素としての働きを明瞭にすること、而して此概念の創造的價値を闡明することの三要件を滿足させる必要があるであらう。第一については、たとへばカントの物自體がライプニッツのモナードの變容攝取であることを考證することなどは、物自體卽個體と見る著者の見解に、一の有力なる歷史由來的基礎を與へるものであらう。此方面については、思ふに他日公にせんとを期せらるゝ詳細なるカント研究に充分究明せられることであらう。第二第三の點に就ては本書の前後二篇を通讀する人の容易に看取し得る如く、大なる程度に於ての成功を示して居ると思はれるのである。

私は今迄本書の第一篇だけについて、感想とも紹介ともつかぬことを述べて來た。然るに本書の殆んど央を占めて居る第二篇研究及び補遺には、第一篇を補完すると云ふ以外に、一々獨立しても多大の價値ある論文七章が收めてある。就中第二章『サルヘルム・キンデルバント』の如き、嘗て哲學雜誌に出た當時と變らぬ深い感興を以つて今度も讀まされたものである。學徒としての興味を動かし反省を促すものは、却つて此篇に多く發見されると云へるであらう。

大正六年は日本の思想界の仕合せな歲であつた。徹底せる批評と獨創的建設とに於て空前の高さと深さと强さとを示した『自覺に於ける直觀と反省』(西田博士著)の出たのが十月の初めであつた超えて十一月の初め新と大と精とに於て優に世界的地位を要求するに足る本書を獲た。斯樣にして我國民的文化意識は世界的意義と妥當とを獲得し行くのである。而して此兩書が何れも私共の恩師の手になつたものであることでは私達の心窃かに自己の誇りとして感じつゝあることを言はずには居られない。又斯る名著を續々世間に提供しつゝある出版書店に對して厚き感謝の意を表したいと思ふ。岩波書店發行　定價二圓五十錢。(錦田義富)

心理叢書
第五册　**國語のアクセント**

文學士　佐久間鼎著

『抑、國語は國民の知能啓發の第一步をなす最大切な道具であるのみならず、國際競爭の優者の重大な資格たるべき國民精神の浮化裝置である、國語は區々たる學校教育のための國語ではなくて國人の精神生活を培ふ日常の糧であり、國民性情を養ふ米の飯である。かくの如く重大な意義を有する國語の研究に於て從來劃合に滿足な成果を收め得なかつた原因に就ては色々の見解もあらうが其研究の對象を現代の生きて動いてる國語に採ると言ふ事をし